
○議長（土屋清武君） 休憩前に引き続き会議を開きます。

（午前10時58分）

◇ 渡辺 文彦 君

○議長（土屋清武君） 一般質問を続けます。

通告順位2番、渡辺文彦君。

（3番 渡辺文彦君 登壇）

○3番（渡辺文彦君） それでは、通告に従いまして壇上より一般質問をさせていただきます。

今回の私の質問は3点であります。

1点目は、一旦中止しました花畑がまた再開するというので、その花畑の事業再開についてお伺いしたいと思います。

2点目は、道の駅花の三聖苑に設置予定の直売所の件について質問したいと考えております。

3点目は、町長の強い意向で進められた順天堂直通バスについての今後の展望についてお伺いしたいと思います。

この3点はいずれも町長就任以来強い町長の意向が働いて事業が進められてきたものでございます。

そして、今後3年間の事業計画の中でもこの事業に対してのある程度の経費の見積もりがされております。

いま、この12月議会はおそらく今後の来年以降の予算に対しての位置づけで大変重要な議会であることを私は認識しております。

来年の予算がどのような形で進められるか、いまここである程度の方向性を確認しておかなければいけない時期だと考えているからです。

それで、この事業が、今回あげましたこの事業が必要性とか、重要性、妥当性また将来性を含めて、今一度見直す必要もあるんじゃないかという疑問意識がございますので、あえてここで質問させていただくわけがございます。

また、この事業の決定にあたり町長の強い意志、意向が働いているわけですがけれども、その辺が庁舎の幹部の中でどのように意識が共有化されて事業化されてきたのかを確認していきたいと考えております。

それで、私が今回この事業について問う大きな目的でございます。

壇上からの質問はこれにて終わります。

(町長 長嶋精一君 登壇)

○町長(長嶋精一君) 渡辺議員からの質問にお答えしたいと思います。

1. 田んぼをつかった花畑再開について。

田んぼをつかった花畑を一時中止するとのことで、平成30年、本年度の予算から当該経費を見送ったにも係わらず、また来年度は事業を復活するとのことであるが、その理由と今後の展望はどのようなものかについて伺います。

お答えします。私は、平成30年度予算に花畑の予算を計上しませんでした。これまでの一般質問においてもお答えしたとおり、今後花畑をまったくやらないと言っているわけではございません。事業を漠然と継続するのではなくて、今一度、事業効果や実施方法も検証しながら、見直すべきは見直していくことが必要であるとの考えからそのように対応したものでございます。

平成31年度は、以前とまったく同じような花畑にはいたしません。民間の方々が行うエリア以外の部分については、面積や花の種類を変えて協力し合いながら行っていきたく思っております。

今年度花畑を行政、住民、事業者が一体となって協働で進めていく新たなスタートの年としてまいりたいと考えております。

2. 直売所開設についてでございます。道の駅パーク構想に基づいて、三聖苑に直売所を建設するにあたり以下の点について伺います。

①直売所の利用人数を9万7000人と試算しているが、その根拠は何ですかということであります。

お答えします。先月の議会全員協議会において、道の駅花の三聖苑の想定収支案について説明をいたしました。

整備後の道の駅については、天城山房の飲食と直売所での販売が収入となり、全体の事業収益を算定するにあたって、年間の道の駅利用者を9万7000人と見込んでおります。

これは町内や近隣の直売所の利用実績を勘案したもので、本来ですと町内や近隣のスーパー利用者なども同じ商業圏域に入りますが、これらについてはあえて見込んでおりませんので、過大な数字であるとは全く思っておりません。

直売所についての2つ目でございます。町内にはすでに2か所の直売所があるが、新たに開

設となると他と違う特徴が必要と考えるが、どのように差別化を図るのかという質問でございます。

私は道の駅を観光客と住民が集う一大交流ゾーンにしたいと考えています。

また、道の駅で「地場の産品が買える」、「地場の料理が食べられる」といったニーズに応えられる道の駅でありたいと思っています。

直売所につきましては、農林水産物だけでなく、加工品、松崎ブランド、町民の方の工芸品や姉妹都市の産品など松崎町のあらゆる地場産品が集まる直売所にしてまいりたいと思います。

また、手数料率はなるべく低く抑えて、生産者や消費者にとって少しでも利益のあるものにしたと考えております。

直売所についての3つ目の質問でございます。パーク構想では、管理運営に関して地域住民との係りの必要性が示されている。地域住民との話し合いの場はもたれましたか。また、管理運営を振興公社に委ねる方向で考えているようだが、振興公社に経営のノウハウは十分に備わっていますかという質問であります。

お答えします。道の駅・旧依田邸の整備活用につきましては、町で一方向的に基本計画を策定したわけではなくて、議会選出議員、地元関係者、産業関係者、まちづくり団体、金融機関などで構成する道の駅パーク構想基本計画策定委員会を設置し、協議検討を行い本年3月に基本計画を策定したものです。

その後、基本計画については、区長会、町政懇談会などを通じ町民の皆さんに説明をしてまいりました。

また、農業委員会が本年3月に策定した松崎町農業振興ビジョンの中では、販売利益の高い直売所の建設が明確に謳われていることから、農業者の皆さんがこれからの農業振興の一つとして直売所の必要性を認識していただいているものと、嬉しく思っております。

なお、全世帯を対象に去る11月26日に説明会も開催し、皆さんのご意見をいただいたところでございます。

経営につきましては、人材面での教育が重要となってきますので、今後先進施設での研修等を考えてまいりたいと思います。

3. 順天堂病院直通バス運行についてでございます。病院への直通バスの実証実験の結果をどのように捉えているのか、また、今後この事業をどのように進めるつもりでいるのかについて問いますということでもあります。

お答えします。順天堂大学附属静岡病院への直通バス運行については、南伊豆・西伊豆地域公共交通活性化協議会において計画を策定し、交通事業者との調整を経て4月25日から10月31日まで実証実験を行ってまいりました。

実証実験を行った目的は、現在バスと電車を利用して通院している方の移動負担を軽減し、利便性を図ることと、自家用車通院の方のバスへの転換を図ることでした。

実証実験の結果については、行政報告で説明しましたが非常に低い利用率となりました。これは、私の利用予測の甘さもあったと思いますが、自家用車を使用する方が予想以上に多く、自家用車からバスへ転換する方は少なかったと感じております。

現在、協議会にて検証結果を踏まえ、平成31年4月以降の新たな運行方法について、継続協議しているところでございます。

以上、渡辺議員からの質問に回答しました。

○3番（渡辺文彦君） 一問一答でお願いいたします。

○議長（土屋清武君） 許可します。

それでは、通告に従いまして、花畑の事業からお伺いしたいと思います。

そもそも花畑を中止する・・・再開するのはともかく、花畑を今まで町はどのような方向で進められてきたかをまず確認したいと思います。

○企画観光課長（高橋良延君） 花畑につきましては、平成12年から田んぼを使った花畑ということで、農閑期の田んぼを使ってあそこに花畑を作ってきたわけです。

そういった中で、総合計画にありますとおりそれを協働でやるまちづくりということに位置されているわけですね。そのところは。

ですから、本来町だけではなくて、住民の皆さんもその花畑の中に参加していただいて、一緒に花畑を演出して観光誘客も図ってまいりたいということで始められてきたというようなことだと思っております。

○3番（渡辺文彦君） 今回中止に至った経緯の中で、町長は費用対効果の面が薄いということもかなり強調されていて、強調されていたと思います。

そういう意味では、今の課長の答弁ではあまり費用対効果は初期からは考えていなかったということでもいいですか。

○企画観光課長（高橋良延君） 当然費用対効果・・・、毎年700万円位ずつ費用をかけているということでありましてけれども、当然そのお金をかけるには、効果がどうであるかということは検証しなければならないと思います。そういった中で、観光交流人口がどうなのか、そういった

たことは一つの成果指標になるかと思えますけれども、そういったことをやはり交流人口を伸ばしたいという中で、そういったことの花畑は一つの大きな目的でやってきたのかなと・・・、交流人口が増えれば当然そのところの経済効果は見込まれるということであると思えますので、そういった狙いであったと思えます。

○3番（渡辺文彦君）　ということは、経済効果は後から付いてくるものなんですね。おそらくこの計画の中では・・・。

そうすると、計画の中止を判断する根拠として経済効果が薄いというのを前面に押し出してくるというのはやっぱりちょっと疑問符なんですけれども、町長、その辺はどう考えますか。

○町長（長嶋精一君）　経済効果については確かに言及しました。

平成3年から平成28年を比較すると、交流人口は57万人減っております。花畑をやったのが平成12年であります。

宿泊人員は平成3年と平成28年度を比較しますと、25万人減っております。宿泊施設については、平成4年度比較でいいますと、145軒減っております。ただ、私はそれだけで言っているんじゃないくて、長年やって、当局あるいは住民の皆さん方もかなりマンネリ化しているのではないかと・・・、漠然という表現しましたが、そういうのがあるんじゃないか、そうしますと、やっぱり年間700万円を税金として投入しているわけですから、これではいけないという思いが非常に強くありました。

私は議員の時に、渡辺議員も一緒にいましたけれども、渡辺議員もものすごくこれについて批判をしていたという記憶があります。花畑について。

それで、いま、この花畑の問題とは全然違うんですけれども、四国徳島のあの有名な阿波踊りも・・・、本件とは全く内容は違いますが、中止しようか、続行しようかという大きな問題がありました。近くの稲取ではどんつくまつりは中止しています。

やっぱりここら辺は、やっぱり全国的に見直すところは見直すというような風潮が私はあったと思います。

ただし、これらがあったから私は見直そうとしたわけではありません。議員の時から思っていたことであります。

そして、とりあえずやって、今回は見送って地域の皆さんあるいは事業者とさっき言いましたけれども、一体となって、行政だけでなく一緒にみんなでやろうという気運が高まってくるのを待ち望んでおりました。

したがって、一部若い人たちがやるぞと・・・、小規模ですが、やるぞということが決まりま

したので、それなら町も参加しようということになっているわけですがけれども、藤井議員からもそういう力強い言葉もありましたから、我われはそれに参画してやっていこうと思っております。

スタンスがコロコロ変わっているわけではありません。とにかく原資は税金です。それを有効に使っていかないと私はまずいと思っているわけであります。以上です。

○3番（渡辺文彦君） 私も町が使う予算はやっぱり町民にとって利益が還元されるような形で踏襲されるべきだと考えます。それは私も当然のことだと思っています。そういう意味で、今までの花畑が費用対効果がみられなかったから見直したいという意向であったわけです。

その中で、町長はいま町民の活動も形骸化しているみたいな表現があったと思うわけですがけれども、ただ、元々、これは、ぼくは今年の予算審議の時に、確かに費用対効果は薄いかもしれないけれども、町民の活動もあるんじゃないかと、その辺はどう考えるのかということをお尋ねしているはずですよ。

その時に、課長は、ほとんど町民は参加していない。行政がほとんど主体的にやっているんだから、ここは一回見直すべきだろうみたいな発言があったわけです。

でも、課長の先ほどのこの花畑の事業の目的、そもそもの目的は何ですかとお尋ねしたところ、町民との協働で町を何とかしたいという方向性だとおっしゃったわけです。だとするならば、その事業を中止を決定する以前に町民にもっと問いかけて、どういう形でこれをもっと活性化できないかという手続きを踏むのは、ぼくは当然のあり方だと思います。

ところが、これに関して、実際に実行委員で動いていた方にも何にも話がなくて突然の中止の発表があったわけです。

この辺はちょっと話が違うんじゃないかとぼくは思うわけですが、その辺は、課長、いかがですか。

○企画観光課長（高橋良延君） 当然この花畑は協働でということで、当初平成12年の時に始まったものです。ただ、その当時は、あの花畑のところに例えば、農業振興会の皆さん、農業者の皆さんがあそこに野菜を持って来て売っていただいたり、町内の売店、商業者の方が来てテントを立てて売っていただいたりとか、そういった活動があったんです。実際に。

ただ、そこがもう何年かしていく中で、一軒なくなりという形で今はもう観光協会のところしかないような状況になってしまった。

そういったやはり・・・、あそこをやるからには、当然町民の皆さんにも、例えば、商業者の皆さん、農業者の方にも出店していただいて、あそこを賑やかにしていただいて、それでお金

をそこで落としていただくとか、そういったことをやりながら、本当に皆さんと一緒にやっていきたい。それを当時はやっていたんですけれども、そういったものがなくなってきたというようなことで、やはりそれは、我われの努力も足りなかったということはあるでしょうけれども、そこは今一度やはりこの花畑を活用するということをややはり町民の皆さんで今一度考えていかなければならないなというのが一つあったわけでございますので、決して、町民の皆さんをないがしろにというか、そういったことではなくて、そういったことは常に考えて花畑をやってきたということでございます。

○町長（長嶋精一君） 渡辺議員も確かさっき言いましたけれども、議員の時には、全く無意味だというくらいのことで花畑のことについては言うておりましたけれども、さっきの質問は、あたかも我われの方が勝手にやっているようなことを言いますけれども、私も議員の時にはそう思っていました。渡辺議員もそう思っていたという事実があるわけですね。

それで、もうこれについては、先ほど言いましたとおり、当局とそれから若い人たちを中心にやろうという雰囲気がいま出ているわけですから、私どもが考えていた当局と町と住民と一体となってやろうという雰囲気が出ているわけですから、それについては理解をしていただきたいなと私は思うわけでありませぬ。

その中で住民が全く協力していなかったということを言っているんじゃないなくて、一部の人はかなり協力をしていただきました。

しかしながら、全体に浸透をしていなかったというふうに思います。やろうじゃ会の人たちも一生懸命やってくれています。今でもやってくれています。

しかしながら、ほかの人たちにあまり関心がなかったように思います。そういうことでございます。

○3番（渡辺文彦君） 町長がおっしゃるとおりぼくもかつては花畑の事業というのはかなり無意味なのかなというのを感じておりました。

でも、今年の予算の審議の時に、私はその以前に考え方を改めております。だから、あえて質問しているわけです。

なんで変えたかといったら、やっぱり行政というのは町民との協働が一番大切だということに気がついたからです。費用対効果はもちろん当然必要です。税金を使っていく以上は赤字を垂れ流すような事業はしちゃいけません。基本的には。でも、それ以上に、それを阻止するのも町民と協働があつての話なんですよ。おそらく。

いくら事業ばかり一生懸命進めていても町民の協働がないところに利益はおそらく生まれな

いし、町民にとって還元されるものは薄いと思います。だからこそ、ある意味では費用対効果には目をつぶってもこの事業をどういう形で進められるかを検討したかったわけです。

それを町長は一方的に中止という形で出てしまったので、多くの町民がとまどったわけだとぼくは思っています。それはそれでいいとして、今回、この、町がどのような形でこの事業を・・・、今度の実行委員会の方たちとバランスを取りながらやっていくのか、その辺のスケジュールとか方向性をちょっとお伺いしたいと思います。

○企画観光課長（高橋良延君） 町としましても花畑実行委員会の方々と話し合いはもっています。代表の方と事務局の方ですけれども、そういった方々と話し合いを持っておりまして、当然実行委員会の意向も聞いています。来年度以降、花畑を持続していきたいということは確認をいたしておりますので、そこは花畑の実行委員会のやる方々、そして、それ以外のところについては、町の方も協力してということをお先ほど町長も申し上げましたので、そこは一緒に協力しながら行ってまいりたいと思っています。

意向の確認はいたしております。

○3番（渡辺文彦君） 今回中止した理由が、費用対効果の面と開花不揃いであまりきれいじゃないということがあったと思います。また、町民の参加が薄かったということがあったと思います。

今回、有志が動き出したということで町民の参加がちょっと見えてきたかなというところがあると思います。でも、今後また仮に事業が再開されていっても花が必ずきれいに咲くという補償は・・・、来年になってみて、また再来年になってみないとわからないわけですね。

今度、種の種類を変えとかということを探しているみたいですが、それは以前からやられてきたわけじゃないですか。今回町が参加して、今までの花畑の事業が、町が思うような事業展開になるという保証はどこにあるのか、その辺を聞きたいんですけど、ぼくは。

○統括課長（高木和彦君） この数年当初予算の時に必ずその花畑が費用対効果がどうかとか、いろいろぼくらは批判されて、毎年ドキドキしながら議会に参加しました。

今回、そういうことを受けて、今まで事業というのは漠然とやっているところが多いから、一回休もうとして、その結果、有志の方々が出てきて、新しい方向が出てきて、ぼくはすごく名実ともに町民参加の事業になったと思っています。

それを、今の時点で花が咲かなかったらどうするとか、どうのこうのよりですね・・・、そうならないように連作障害とかを考えながら、また場所を替えてみるとか、時間を替えてみると

か、種類を変えてみるとかいうんですけれども、花が咲かなかつたらどうするかということをお場で言われてしまうと、それこそ、英断して一歩進もうと、今までと違った形で一歩進めようということが途切れてしまうことも・・・、ちょっと思うものですから、その辺については、今後有志の方々と一生懸命いろいろ相談しながらやっていきますので、ご理解いただけないかなと思います。

○3番（渡辺文彦君） あえてぼくはその話をしたのは、確かに作物は天候にも影響されますし、いろんな自然環境の中で育っていくわけですから、予測できない部分がかなりあるから、結論はどうなんだと言われても困るというのはわかります。ぼくも。

でも、かつても種の種類とか、いろんな耕作の仕方を研究されてやってきたはずなんです。その辺は、どのように改善されているんですかということをお聞きしたいんです。ぼくは。

今後やる時に、今までと違ったどういう改善点があるんですかということをおぼくはお尋ねしたい。

○町長（長嶋精一君） 私の前の齋藤文彦前町長が渡辺文彦議員の質問に対して、渡辺文彦議員の質問を聞いていると将来が暗くなると答えたことをはっきり覚えています。今も全くそのとおりでございます。

将来のことはわかりません。しかし、最善を尽くすというのが我われの考えでございます。

○3番（渡辺文彦君） 確かに先のことはわからないんでしょうけれども、行政というのは基本的には10年～20年先を町民の方に提示する必要は、ぼくはあると考えています、そのことはまたあとでちょっと触れますので、これはこの辺にして・・・。

もう一つ確認だけしておきたいことがあります。今回花畑の事業再開にあたって、総合計画の数字では、今まで花畑事業関係にかかる経費が2100万円あったと思います。それが1800万円に・・・、今年の2月の全員協議会で示された総合計画の中にあつたわけです。それが、この11月の総合計画の中ではまた2100万円に復活しています。ということは、今後この花畑に係る経費が増えたことは、また再開するということは、実質300万円位の経費を見込んであるということですか。

○企画観光課長（高橋良延君） 具体的には、当初予算の中で出しますけれども、いまおっしゃいましたように、花畑の実行委員会以外のエリア部分の今の見込みとしては300万円程度になるかなと思います。

○3番（渡辺文彦君） ぼくもこの実行委員の方、会長あたりにもちょっとお伺いして、どういう意向で今後進めていくんですかということに対して、ぼくらはやれることをやるしかない

と、来年以降町がどういう協力をしてもらいたいかということをおっしゃっていただいても、まだ結果が出ていないので、自分らは方向が示せないということをおっしゃっていただきました。実行委員会の方ではおそらくそういうことしかできないと思うんですけども、町としてみれば、予算化する、事業として予算を組む以上は、ある程度の方向性が見えなければいけないでしょうから、何らかの手立てが必要なんだろうけれども、だから、その辺をやっぱりその実行委員会の方たちと十分協議されて、また費用対効果も含めて町民の期待に応えられる方向性を模索していただければと思います。この件に関してはこれで終わりたいと思います。

2点目ですけれども、道の駅パーク構想の問題、直売所があるわけですから、この件に関していろいろのところからいろいろな意見があって、町もいろいろな取り組み、説明会等をされてきました。

ぼくは、基本的に、この三聖苑における直売所の位置づけは、町長の言葉を借りて言うならば、三聖苑は今までやってきて、赤字を垂れ流してきたんだと、だから、何とかしたいんだということですよ。

そのために直売所か何かを作って地域の活性化を図って黒字化できればいいなというのがおそらく町長の考え方だと思います。となると、直売所のもっている位置づけが非常に重要になってくると思うわけですから、そうすると、直売所のもっている売上が非常に大きな意味をもってくると思うわけですね。

当然それには、売りを増やすには経費がかかりますから、経費を引いて、売上から経費を引いたところが利益になってくるわけです。その利益を大きく左右するものに利用人数というのがあるわけですから、町が9万7000人を計画の目標値に挙げているわけですね。

現状は、三聖苑の利用が約5万人弱です。それを、これからまだ4万人近く増やす・・・4万から5万位増やさなければいけないということになるわけですから、その数字の見積もりが町内の2か所にある直売所、またほかの近隣のスーパー等の入込みを勘案して、9万7000人という不等式ができています。真ん中のXは9万7000人という不等式が示されていたわけですから、この方程式というのは、どうやって導かれるのか、ぼくは理解できないんですけども、その説明をしていただきたい。

○企画観光課長（高橋良延君） 利用見込みについてはやはりそれぞれ見込み方というのはいろいろあるかと思います。

ただ、我われが見込んだのは、実際の町内のそういった類似施設、あと近隣の類似施設、そちらの利用実績ですね。実際に何人入っているのかというようなこと、そこのところをまず実

績として、それを基に見込んだということです。

ただ、本来であれば、それだけじゃありません。先ほど町長が言いましたように、町内にも大手スーパーがあります。隣の町にも大手スーパーがあります。そういったところにもかなり多くの消費者が行っているわけです。実績があるわけです。そういったところまで、この中の事業実績では見込んでいないわけですので、あくまでもこれは、近隣、そういった類似施設のところだけを見込んで、この9万7000人ということを見込んだということです、それは見込み方はいろいろあるかとは思いますが、町としてはいま言ったような形で見込んだところでございます。

○町長（長嶋精一君） 不等式とかおっしゃいましたけれども、よくわかりませんが、南伊豆町の湯の花、下賀茂の・・・その利用客は年間16万9000人でございます。湯の花は16万9000人です。

我われが想定しているのは、9万7000人でございます。非常にコンサーバティブな数字だと思っております。不等式とか何とかというんじゃなくて、人間には努力というものがある。努力、工夫、英知・・・、英知はノーリッチじゃないです。ウィズダムです。

そして、一生懸命がんばるといふ姿を見たら、お客さんは必ず来てくれると私は信念を持っております。

そして、何よりも大切なことは、安くて良い品物を提供することです。これは、間違いなく私どもは実行していきたいと思っております。

世の中は、算数で導かれるものではないと私は思っております。

○3番（渡辺文彦君） 世の中は算数ではわからないです。確かに。でも、我われが事業を興す時に、誰しも事業を興す時には数字をもって予測します。算数とか数学はいずれにしても、ある程度の数字をとらえながらその数字の根拠を埋めながら計画を立てていきます。

まさに事業計画はそのためにあります。その数字が狂った時にどうするかを判断するためにも事業計画はあるわけです。事業計画を立てる時に、その数字の根拠を示さなければ、計画は成り立ちません。ただ数字を*****、算数でどうのこうので社会が成り立たないとかそういう話ではありません。

事業を興すのには、事業をやるだけの先見性を・・・予測するための数値が絶対に必要です。ただやみくもにやるわけにはいきません。

だから、この数字の根拠となる一つの根拠・・・その数字の一つの根拠として利用人数というのは一つの目安になってくるわけじゃないですか。だから、その利用人数の過ちがあれば、計

画がすべて狂ってくるわけですね。

仮に、今回町が出した事業計画に9万7000人で若干の・・・、10パーセントの利益でもって1300万円位の利益があったと思うんですけれども、この1300万円は僅か2500人が・・・、その9万7000人から2500人減少するだけでこの利益が飛んでしまいます。単純に9万7000人以上の利用者がなければ、あそこの直売所は今の計算では成り立たないということを意味しているわけですよ。

だから、そこの9万7000人の人間はどこから連れてくるのかといたら、湯の花には16万人いるとか、そういう話をされても困るわけですよ。町内では既にもう直売所が2つあって、そこでもう13万人近くの利用者があるわけです。それに更に9万人を乗せるということだから、松崎町内だけで20万人以上の需要見込みがあるということの意味するわけじゃないですか。それは可能なんですかね。それが疑問でしょうがない。その辺の説明をしていただきたい。

○企画観光課長（高橋良延君） 需要でということでありましたけれども、一つちょっと事例といますか、申し上げますと、いま町内に2つの売店があります。それで、後からできた方は4～5年前ですかね。できました。その前にやっていた売店はもう10年前からやっていました。その新しい売店ができた時に、じゃあ、その前にやっていた直売所が半分になったということはございませんでした。

むしろ利用者は横ばいか増えていると聞いています。したがって、1つが2つになったから半分になる。利用者が半分になるといったことは、そこは極論過ぎるかなというようなことで、単純に今度は2つが3つになるから、それは3つに分けあうとか、そういったことは・・・、それも一つの議論としてはちょっと乱暴かなと思っています。

ですから、そこは経営のやり方とか、そういったこともあるわけだと思います。ですから、これが2つ目が3つになるからもう利用者が見込めないと・・・、そういったことではない。まさに、その2つの売店が増えているというのは近隣のスーパーとか観光客もいるでしょう。そういったところから消費者が行動変化をしてそこに買い物に来ているというようなことではないかなと考えています。

○統括課長（高木和彦君） こういう数字を出す時に、できればコンサルなんかにだいたいどのくらい入るかということがあれば割と正しい数字が出ると思うんですけれども、なかなかその辺ができないものですから、先ほど町長がお答えしたように、周りの事業所だとか、そういうのを参考にしたということで、やり繰りができないかという話、ぼくらもやっぱり心配なのが・・・、中でも話をするんですけれども、9万7000人見込んで、その時の計画というのは、8

人の職員を見込んでいますけれども、これが例えば、5万人となれば、そこは職員の数を削るとか、やっぱり一番大事なのは、いま何人来るかというよりも、これからどういう経営をしていくかということが一番大きいところでございます。季節によって、天城山房と直売所の職員の兼務ですとか、また繁忙期だとか、閑散期なんかについて雇用するパートを替えるとか、そういう調整というのはやっぱり出てくると思います。

また実際やってくれば、どれだけの生産者さんがここに参加するか、またその品揃えですとか、そういうことでかなりの影響はあると思います。

ですから、本当にここで9万7000人絶対大丈夫ということは言えませんが、少なくとも少ないなりの工夫をする。

また、いろいろ聞きますと、せっかくこの道の駅という特別な環境の中に直売所をつくるわけですから、各種イベントをやったり、職員の接遇なんかについてもかなりの影響があると思いますので、その辺はこの数字というのは、赤字にならないように振興公社や松崎町の職員を入れて、一生懸命努力して、最終的に今の赤字がある程度少なくなって、なくなってゼロになって松崎町民の方の収入が増えたということになれば、それはそれで経済効果があったということで、お認めいただけるのではないかなと信じております。

○町長（長嶋精一君） ある県外の山梨の方ですけども、リピーターです。松崎町によく来る人ですけども、こう言いました。「もう重文岩科学学校も何回も見た。長八美術館も見た。あらゆるそういう素晴らしい建造物は全部見た」と、「いま欲しいのは、松崎町の地場産品だ。地場産品を売っているところが欲しい」というようなニーズがありました。以上です。

○3番（渡辺文彦君） だいぶ時間も迫ってきましたので、ちょっと飛ばしながらいきたくと思いますけれども、今の町長の松崎の地場産品が欲しいということであるならば、現に直売所が2か所あるわけですから、そこを利用していただければいいと思うわけです。

基本的なスタンスとして、ぼくは、この直売所の建設に対してまるっきり反対しているわけではございません。三聖苑の活用はやっぱり考えていくべきだろうと思いますから、この三聖苑が仮に直売所を建設するならば、どういう規模が・・・、どういう人数を見込んで、どういう経営をしたならば利益がでるかということをやっぴり考えておく必要があるという意味でぼくは話をしております。根っから「こんな直売所はやめろ」という考え方はございません。

直売所を取ってしまったら、道の駅を整備してもあそこに呼べるものは何もないわけですから、はっきり言って。

天城山房を・・・、1200円の単価で9万7000人の40パーセントの利用を想定しているわけです。

けれども、この40パーセントも正直言ってあやふやなわけです。元々この赤字はどこから生まれているかといったら、どこなのでしょう。道の駅、三聖苑の赤字はどこから生まれているのでしょうか。

○企画観光課長（高橋良延君） 一言で言うと、利用者を増やすということでございます。今現在4万8000人ということですので、中のそれぞれの飲食形態とか、かじかの湯の形態とかがありますがけれども、基本的には利用者を増やすと・・・、今の利用者ままではそれは赤字がそのまま続いていくだろうというような形でございます。

○3番（渡辺文彦君） 5分の延長をお願いします。

○議長（土屋清武君） 5分延長します。

○3番（渡辺文彦君） ぼくがいまこの質問をした意味は、今の現状はかじかの湯と天城山房ですけれども、結局この両方で・・・、かじかの湯はその工事があつたりして利益が出ないという構造があるということは理解できるんだけど、天城山房自体が利益を上げていないということの方が問題であって、ここで天城山房にお客さんを呼び込みたいといっても今のままではぼくはおそらく無理だと思うんですよ。それをどういうふうに改善していくのかも伺いたいです。集客を伸ばすために天城山房自体の設計図は変えても中身が伴わなければ変わっていないんじゃないか、売上は・・・。利用者は増えないと思うんですよ。どんなイメージを持っているのか。これは関連質問になりますけれども、お願いします。

○企画観光課長（高橋良延君） 当然天城山房の飲食はポイントになるということは全員協議会でも申し上げました。

ただ、その細かい運営については、これからのことになりますので、例えば中でどういった地場の料理を提供するとか、そういった細かいことについては、今後になるかと思えますけれども、いずれにしても飲食、食事というのはポイントであるかなと考えていますので、それが直売所とうまく相乗効果があれば、そこのところは利用者は天城山房の方に行っていただくということで経営のやり方として相互に相乗効果ができるようにしてまいりたいと思います。

細かいことについてはこれからでございます。

○3番（渡辺文彦君） 課長、細かいことはこれからだというんですけども、今の赤字を解消できないような考え方で、新たな事業を展開して、やっぱり事業に利益が生まれるのかどうかということが、ぼくが素直に感じる疑問符なんです。

いま現にある赤字が改善されているならば、ぼくは次の事業展開としていいねという話ではできると思うんですけども、今の事業が赤字なんだから、ただ事業形態を変えただけで黒字にな

るという保証はないという気がするんですね。

やっぱり根本的に赤字になっていたところの見つめ直しというか、検討、再検討が必要だと思っております。その辺は十分していただきたいと思います。

ちょっと時間がなくなってきましたので、ちょっとはしよります。

3番目の管理運営に関してですけれども、それに対して、振興公社が・・・、また町は振興公社に委託したいような話になっているわけですが、ぼくはあえてこの3番目の質問を挙げたのは、道の駅パーク構想に掲げられている最後のページ、99ページの一番最後の方に管理運営手法の検討ということが書かれているわけです。

その中で、町民との協働が必要であるということが強調されていると思います。先ほどの課長の答弁は、この計画は、道の駅パーク構想にいろいろな町民の意見を反映して作ったものだとおっしゃっています。確かにここまではそうです。

ところが、ここで提案されているのは次のことです。これまで、ここで作るまでは町民の意見が収集されて反映されたかもしれません。ところが、それを反映した・・・、それを取りまとめた結果が、これからも町民との協働が必要なんじゃないですかということをこの計画書はいつているんじゃないかとぼくは理解しているわけです。それに対してどういう取り組みがされているんですかということを伺っているわけです。

これがなければ、地域が一体となっていかなければ、おそらく行政がいくらがんばっても活性化しないです。地域の方の大きな協力がなければ、活性化していきません。そのためには、地域の方の協力をどんな形で吸収して反映するのか・・・。

このあいだ、進捗状況の説明会がございました。そこでいろいろな意見を述べてください。意見を反映しますとおっしゃったわけですが、それは来年度の事業計画の中にどのような形で反映されるのかお伺いします。

○企画観光課長（高橋良延君） 当然計画を策定するにあたっていろいろな方が参画してということは申しあげました。その後ということでの議員からのご質問であるかと思っておりますけれども、その後についても地元の方々からいろいろなご提案とか、ご意見、そういったことも伺っております。そこは公式な話し合いの場を持ってということではありませんけれども、地元の方からこういったことをやった方がいいとか、いろいろな提案は承っておりますので、そういったことでも話し合いといいますか・・・、それをもっております。

ただ、今後どういうふうにしていくかということについては、今後管理運営していく中で当然地域住民の方に協力していただくような場面が出てくるのかなと思っています。

ですから、そういった中で、そういうところで地域住民と関係する方々と話し合いを持つということは想定できるのかなと思っていますので、それはあそこで地域の方がいろいろな産物を出したいとか、加工品をやりたいとか、そういったご意見ももしかしたらあるかもしれません。そういったことであれば、そういった話し合いの場は持ちたい。

それで、もう一つ出荷者ですね。地場産品、直売所に出荷していただく方、そういった方々と話し合いといいますか、そういった場はもちたいなと我われはいま考えているところです。

ですから、そこが一番やはり出していただくというのが基本になりますので、そこは町が一方的にということじゃなくて、出荷者の代表者何名かでもいいでしょう。そういったことの中で一緒に進めてまいりたいとちょっと考えているところでございます。

○3番（渡辺文彦君） 時間がなくなりましたので、この質問に対しては最後にしたいと思うんですけれども、そもそも管理運営に関して町民の参加を募った方がいいんじゃないかという提言がされて、ぼくもそのとおりだなと思っていたわけなんですけれども、町のこの管理運営の主体を振興公社という位置づけがされているわけですね。

このあいだの全員協議会の中では、振興公社がまた誰かに委託することも可能だという話がされていたと思うんですけれども、その辺も含めて管理のあり方、今の振興公社のあり方では僕はおそらく無理だと思っています。実際にほかの・・・、振興公社に委託しているところは全部赤字を生んでいる、今のところまつぎき荘はギリギリ±0に近いところなんですけれども、それ以外は赤字を生んでいますから、経営能力というのを正直言って疑わざるを得ないとは思っています。

それでも、やっぱり町民の参加があれば、赤字を生んでも町民の理解は得られるのかなという意味で、町民の大きな参画を求めるべきだとぼくは考えております。

次の最後の問題はちょっと時間がなくなりましたので、簡単に・・・、本当は大切な問題なんですけれども、簡単にやらざるを得ないもので、お話ししたいと思います。

奇しくも町長が広報まつぎきで順天堂行きバスのことについて触れられております。この見込み違いになった原因が私の予測の甘さといっているんですが、その次が、バスを利用しない人が割と多かったということで話が進められているわけなんですけれども、この見込み予測というのは基本的にはバスの利用者がどういうことで、どういう方がそのバスを利用するかというのを全て計算した上の見込みじゃなくちゃいけないはずだから、前の文書というか、予測は当然後ろに書かれているバスの利用をしない方々がいたということも予測して数値というか、計画を出すべきだったとぼくは考えるわけですね。

だから、根本的に何を言いたいかという、これは町長の見通しの甘さというか、そこにあつたとしか言いようがないと思っているわけです。

町長は、現場を歩いて現場の中のいろんな問題点を拾い集めて、それを機能的に物事をまとめていけば、推論をしていけばある程度の一定の結論を出せると、それで私はだいたい今まで成功してきたんだということをおっしゃっていたんですけれども、基本的な推論の中では回答・・・推論は100パーセント正しくはございません。かなり間違いを含んでいる可能性があります。その間違いを含んでいるのをどうやって訂正するかということをお伺いしたい。

自分の推論が間違っているかもしれないということをお伺いしてそれを正していくのか、町長、その辺をお伺いしたい。

○町長（長嶋精一君） その前に、さっき全ての町営の施設が赤字をこいているという表現をなさいましたけれども、議員さんが赤字をこくという表現はいかがなものかと私は思います。

それと、私は、バスについては、署名運動をやって、一軒一軒回って、そのニーズがあると確信したわけですが、その方が頻度、何か月に1回行っているとか、毎月行っている、週に何回行っているとか、そういうことまでは一人ひとりとお会いしてそこまでは聴取しておりません。

そして、自家用車で行っているとか、誰かに連れて行ってもらって行っているとか、そういうことも聴取しておりません。ただ、町が把握している沼津方面へ重篤な病気を抱えている方が・・・順天堂病院に限りませんよ。沼津方面に行っておられる方が相当多いということは掴んでおりました。

だから、これをやったら喜ぶなと思っていたんですけれども・・・。だから、私は実行はしたわけです。しかしながら、乗る方が極めて少なかったという事実であります。推論とか、何とかと難しいことを言っていますけれども、事実はそういうことでもあります。

だから、もっともっと研究してやればよかったんでしょうけれども、私は、なるべく早く公約を実現したいということがありましたから、実証実験に・・・、企画観光の方で準備をさせていただいてやってわけがあります。

これらについての行政の負担は全くありませんから、それだけは承知しておいてください。

そして、また来年の4月から新たに仕組みを変えてやりますので・・・

○議長（土屋清武君） 町長、時間がありませんので・・・。

○町長（長嶋精一君） そういふことをご理解いただきたいと思ひます。

○議長（土屋清武君） 時間がなから急いでください。

○3番（渡辺文彦君） 町長の指摘にあった今の言葉は訂正します。赤字を生んでいたに訂正してください。

ぼくが、いまこのことに対して言ったのは、推論・・・、人間は何でも物事を考え出す時に仮定しなければ先に進めないわけですから、仮定しても構わないわけですがけれども、過ちを起します。その過ちをどうやって訂正するかという意思決定のあり方をどうすべきかということを探ねたかったわけであります。

時間がないですから、これにて終わりにします。どうもありがとうございました。

○議長（土屋清武君） 以上で渡辺文彦君の一般質問を終わります。

午後1時まで休憩いたします。

（午前11時53分）
